



Time to Go

1995-2020

Yutaro Yamada

Prologue

小学生から続く電車通学、はじめて iPod を手にした日から、音楽を聴きながらの登下校が楽しみの一つとなりました。次第に、僕の中で移動することと音楽を聴くことは切っても切り離せない関係となり、日々繰り返す通学の中で聴いた音楽を再び聴くと、その時その場所で見ていたもの、天気や時間帯、自分が置かれていた状況、感情が思い起こされるようになっていくようになりました。この体験から、移動中に音楽を聴くということ、音楽によって想起される過去の移動中の風景について追求したいと考え、卒業プロジェクトの研究テーマとして一年間かけて取り組んできました。その研究成果物が本書になります。制作を振り返ってみると、過去に自分が聴いた楽曲を通して、今いる場所からその時に見ていたもの、感じていたことを想起し、過去に自分がつけた注釈を探すような作業は、懐かしくも新しい発見が多かったように思います。そして、何てことのない日常の移動中に音楽を聴くことが僕にとっては最高のトリップであり、それは楽曲の視聴時間と目的地までの移動時間というレイヤーが重なりあうことで享受できている体験なのだと再認識するきっかけとなりました。

この本には、二つの読み方、使い方があります。一つは、僕の自分史 / 風景集として。もう一つは、音楽を聴くきっかけとなるツールとしてです。前者は、僕が楽曲を聴いて特定の日の天気や四季の移ろい、感情や状況を思い出すことのできる 100 曲を選び、それにまつわるエピソードを時系列順に並べたものを一つの作品として Chapter01 に収録しました。後者は、100 曲それぞれのエピソードを分類することで出来たプレイリストを提案している Chapter02。読者の方が自分史 / 風景集、プレイリストを編み出すための手がかりを提案している Chapter03 から構成されています。どの Chapter から読んでもいいと思いますが、何よりも本書が、音楽を聴くことについて、なにかしらの参考になれば幸いです。レコードから CD、配信と、取り巻く状況ががどんなに変わっても、聴いて、感じて、それをまた誰かにそっと教えて楽しむという音楽の本質は、この先も変わることはないと思います。まずは聴くところから始めたいですね。さて、この本の表題通り、時間が近づいているようです。前置きはこれくらいにしまして、それでは新たな出会いと発見へのトリップをお楽しみください。

2020 年 2 月吉日 山田優太郎

Prologue	02
----------	----

Chapter 1 - Autobiography 移動風景と音楽

Talking Heads / Road To Nowhere	12
Buffalo Daughter / Cyclic	13
Cornelius / Tone Twilight Zone	14
Kraftwerk / Autobahn	15
Pet Shop Boys / Being Boring	16
Opik / Traveling Without Moving	17
Todd Rungren / Be Nice to Me	18
Tom Petty & The Heartbreakers / Something In the Air	19
Yo La Tengo / Blue Line Swinger	20
Haruomi Hosono / Korendor	21
The Beatles / Nowhere Man	22
The Style Council / The Paris Match	23
CAN / One More Night	24
Pat Metheny Group / Slip Away	25
Jim O'rourke / Ghost Ship in a Storm	26
Walter Becker / Book of Liars	27
Ryuichi Sakamoto / 旅の極北	28
Yellow Magic Orchestra / GRADATED GREY	29
Robert Wyatt / At Last I am Free	30
Steve Reich / Electric Counterpoint: I. Fast	31
B. Fleischmann / Pass By	32
Stephen Steinbrink / Now You See Everything	33
Terry Riley / A Rainbow in Curved Air	34
Cymande / The Message	35
Penguin Cafe Orchestra / Isle of View	36

The Lovin' Spoonful / Daydream	37
João Gilberto / Undiú	38
Yoshinori Sunahara / 747 Dub	30
Brian Wilson, Vandyke Parks / Orange Crate Art	40
Andy Shauf / To You	41
Bill Frisell / Ghost Town/Poem for Eva	42
David Sylvian / I Surrender	43
Sketch Show / Attention Tokyo	44
Malcolm McLaren / Laurotta	45
David Bowie / Ashes to Ashes	46
Tortoise / TNT	47
Brian Eno, John Cale / Spinning Away	48
The Books / Tokyo	49
XTC / Grass	50
März / The River	51
MELON / P.J.	52
Fleetwood Mac / Albatross	53
Al Green / Let's Stay Together	54
The Avalanches / If I Was a Folkstar	55
Juana Molina / ¿Quién?	56
B.J.Thomas / Raindrops Keep Fallin' On My Head	57
Bibio / À tout à l'heure	68
Amiina / Seoul	59
Brian Eno / Always Returning	60
Cocteau Twins / Lazy Calm	61

The Band / Whispering Pines	62
The Durutti Column / Jaqueline	63
Groove Armada / At the River	64
Devendra Banhart / Saturday Night	65
Dan Hicks / Cruzin'	66
Sam Prekop / Showrooms	67
"Blue" Gene Tyranny / Next Time Might Be Your Time	68
Everything But the Girl / Are You Trying to Be Funny?	69
Arto Lindsay / Over/Run	70
The Dream Academy / The Love Parade	71
Roxy Music / Avalon	72
The Beach Boys / All I Wanna Do	73
Geoff & Maria Muldaur / Brazil	74
Crosby, Stills, Nash & Young / Helpless	75
Suzanne Vega / Marlene on the Wall	76
Prefab Sprout / Cars and Girls	77
Kommode / Fight Or Flight Or Dance All Night	78
Kool & the Gang / Winter Sadness	79
Lali Puna / Everything Is Always	80
King Harvest / Dancing In The Moonlight	81
Curly Giraffe / Water On	82
Wayne Shorter / Tarde	83
Bob James / Feel Like Making Love	84
George Harrison / All Things Must Pass	85
The Pale Fountains / Just a Girl	86

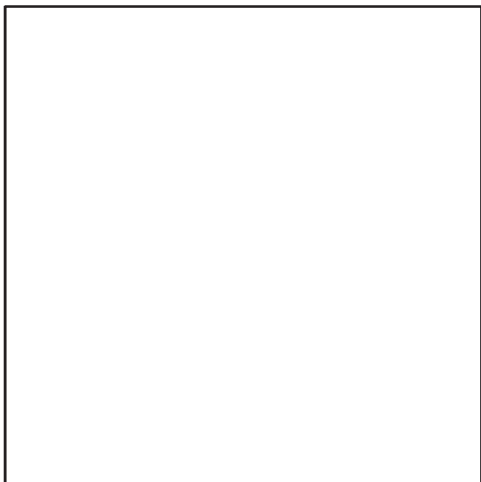
Khruangbin / Cómo Te Quiero	87
Roland P. Young / Twirling	88
Haircut One Hundred / Love Plus One	89
Judee Sill / The Lamb Ran Away with the Crown	90
Fun Boy Three / Our Lips Are Sealed	91
The Go-Betweens / Streets of Your Town	92
Jonathan Richman / That Summer Feeling	93
Scritti Politti / The Word Girl	94
Sade / Lovers Rock	95
Rubel / Mantra	96
Marcos Valle / Fogo Do Sol	97
Timmy Thomas / Dizzy Dizzy World	98
Yukihiro Takahashi / Episode 87	99
The Pastels / Windy Hill (Cornelius Remix)	100
Caetano Veloso / Body And Soul	101
The Smith / There Is a Light That Never Goes Out	102
Sandro Perri / In Another Life	103
Streolab / Infinity Girl	104
Curtis Mayfield / You're So Good to Me	105
D'Angelo / Send It On	106
Hirth Martinez / Altogether Alone	107
Sun Ra / Paradise	108
Lou Reed / Perfect Day	109
Aphex Twin / Nanou2	110
Nina Simone / Little Girl Blue	111

Chapter 2 - Playlist 風景のレイヤーとしての音楽

朝色のため息	114
ある晴れた日に	115
集中	116
汗みどろ	117
風につづく道	118
今日の空	119
歩いて、車で、スपोर्टニクで	120
君と旅行鞆	121
いつも早く着きすぎる	122
午後のレディ	123
おしゃべりしすぎたかな	124
忙中閑あり	125
ガス抜き記念の日	126
バスの席	127
ちょっとツラインダ	128
空気吸うだけ	129
ビルの谷間へ	130
漂流記	131
夏の光	132
夜は静か、通りは静か	133
ひとりぼっちの収穫祭	134
頭寒足熱	135
寂しさの選択	136
月にハートを返してもらいに	137
不眠症	138
二度目の初訪問	139
悪くない。この感じ	140
僕は一寸	141

Chapter 3 - Recommendation 風景を聴き、音楽を見る

Step01 - Look Around	144
Step02 - By Chance, Radio	148
Step03 - Soundtrack	152
Epilogue	157
Index	158



Artist

Title

Album Title (Year)

< Essay >

Chapter 1 - Autobiography

移動風景と音楽

その時に聴いていた音楽で綴る風景集、自分史。

誰でも、あの場所を思い出す一曲、その時に置かれていた状況を思い出す一曲があると思います。それらは、iPhone の中ではデータとしてアルファベット順や発売年順などに、あるいは CD やアナログ盤であればアーティストが決めたアルバムの曲順として格納されています。このように他者が決めたあるルールをもった曲順から解放し、自分が曲を聴いて思い出す日付の順番に並べるということを Chapter01 では試みました。まずは、時を経てから再び聴くことで特定の日の天気や四季の移ろい、感情や状況を思い出すことのできる学生時代に聴いた 100 曲を選び、それにまつわるエピソードを書いていきました。そのエピソードから、それぞれの楽曲をいつ聴いていたのか特定することができ、時系列に並べることができました。この順番にしてから、改めてエピソードを読み、楽曲を聴くことで、それまではバラバラになっていた音楽から想起される記憶が一つの絵巻物のような形でまとめられたように感じました。この絵巻物は、僕が音楽を聴きながら見て、感じたことを記録した風景集であり、当時の状況や心情をも含んだ自分史の一つの形であると思います。音楽で綴る、僕の学生時代の風景集、自分史ができました。



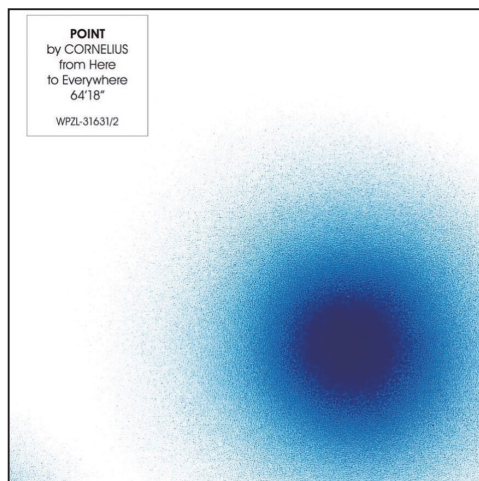
Talking Heads
Road To Nowhere
 Little Creatures (1985)

ラグビーをやっていた高校時代、日曜日は必ず試合。遠征に行くこともしばしばありました。試合会場に向けて出発する時に決まって聴いていた一曲です。思い出深い遠征は狛江、十条、江戸川、大阪、流通経済大学、そして学生時代のピークだと思われるのが、高二的夏のオーストラリア遠征。ホストファミリーの家から試合会場へと向かう道中、並走する自転車に見惚れていた時のことを思い出します。ストレートなポップスに回帰した 6th。



Buffalo Daughter
Cyclic
 Pshychic (2003)

玉川学園前駅の改札から部室まで早歩きで行くとだいたいこの曲と同じ時間でした。試合、練習前に駅でレッドブルをぐびっと飲み干し、身体にスイッチを入れて、いざ出発！という時によく聴いていました。春季大会の朝を思い出します。今思うと、長めの曲を聴く体力は繰り返し聴いていたこの曲でついたのだと思います。何か見えないものを追いかけているような気分になるような一曲です。インプロ色の強いミニマルなインストの疾走感がたまらない 4th。



Cornelius
Tone Twilight Zone

POINT (2001)

高一から早稲田塾に通ってたのは、夜遊びの口実を作るためでした。部活を終え、とりあえず自習室で爆睡。宿題だけ片付けて、誰かとお飯に行ったりお茶をしに出かけた日々。色々な校舎に授業を受講しに行っていたのは、食べ歩きをするためでした。自習室から抜け出す時によく聴いていたのがこの曲です。Cornelius こと小山田圭吾、独自の作家性を決定づけた 4th アルバム。本書には未掲載ですが、"Mellow Waves"(2016) は、大学時代の心の一枚です。



Kraftwerk
Autobahn

Autobahn (1974)

クラフトワーク原体験。母が車で少し遠くに出かける時にかけていて、最初に好きになった彼らの曲です。車での長旅にはもちろんのこと、移動風景と言ったらこの曲は外せないでしょう。少し遠出の移動となると聴きたくなるので、色々な場所の記憶と結びついています。なぜか思い出すのは、理科の課外授業で JAXA に行く時のつくばエクスプレスの車窓。Kraftwerk が 74 年にリリースした 4th アルバム。これぞ、車窓のための音楽ではないでしょうか。